

文献にあらわれるほど、古くからよく知られた地衣類である。今までに多くの変種や品種、近似種が記載され、成分上のちがいも報告されている。しかし、基準標本の選定がされていなかったで、リンネ (C. Linnaeus) の標本庫に保存されているカプトゴケ標本 4 シートを調べシート番号 1273.103 の標本 (下) を選定基準標本にした。通常の顕微結晶法と TLC を併用して成分を調べた結果、タイプ品を含むリンネの標本からはすべて、スチクチン酸、ノルスチクチン酸、コンスチクチン酸を検出した。別に国立科学博物館、服部研、及びハウクスウォースの所持する標本 58 点について、成分を調べた結果、北米東部の 1 標本ではノルスチクチン酸のみしか検出できなかったが、他の 57 点の標本はすべてノルスチクチン酸の外にスチクチン酸、コンスチクチン酸の存在を証明することが出来た。カプトゴケの近似種はいずれも粉芽を持っていないので粉芽を持つ *Lobaria pulmonaria* (L.) Hoffm. とは区別できる。

□Chicita F. Culberson: **Chemical and Botanical Guide to Lichen Products.**

628 pp. The Univ. of North Carolina Press, Chapel Hill, N. C., U. S. A.

\$ 12.50 著者は地衣学者 William L. Culberson の夫人で、夫君とともに数カ月の滞日生活を楽しんだことがある。朝比奈泰彦・柴田承二著の *Chemistry of Lichen Substances* (1954) が絶版になってから久しく、最新のデータによる同様な本の出版が望まれていた。本書は第 3 章 *Chemical Guide to Lichen Products* と、第 5 章 *Botanical Guide to Lichen Products* とを軸として構成されている。第 3 章では柴田承二博士が提唱した新しい分類方式によって、約 300 種の地衣成分を排列し、各物質について融点、その他の物理的性質、化学構造などを示し、さらに文献とともに地衣類における分布が示してある。朝比奈・柴田氏の本にあったような分離、構造決定、誘導体などについての説明はないが、その物質が地衣類以外の植物群から報告されている場合には、その分布も記されている。第 5 章では地衣類約 2000 種について種類ごとに、文献をあげながら化学成分が示されている。つまり、地衣類の種名と地衣成分のどちらからでも互に索引できるように工夫されている。これからの地衣類における *Chemotaxonomy* という見地からすれば、第 2 章の「地衣成分とその生合成および菌類代謝産物との関係」に述べられている著者の見解は大変参考になるであろう。本書に使用されている地衣類の学名は夫君の協力もあって最新のものである。全体にわたって夫妻協力のあとが見られ、本書はその見事な結晶と見るのはヒガ目であろうか。1965 年までの文献は殆んど完全に近いまで蒐集し、1967 年までの文献もかなり集められている。地衣成分に関する研究は日進月歩の状態なので、本書完成後著者は直ちに補遺の編集にとりかかっている。

(黒川 道)